イスラーム神秘主義（スーフィズム）の思想と実践

青柳かおる

1　スーフィズムの思想と歴史

きょうは「スーフィズム」、イスラームの神秘主義についてお話しさせていただきます。はじめに「スーフィズムの思想と歴史」から、お話しいたします。

「神秘主義」というのは、イスラームに限らず他の宗教にもよく見られる現象です。簡単に説明しますと、内面――人間の心を、修行などによって浄化することによって神に到達しようとする。そういう立場のことを神秘主義といいます。

「神との合一」を目指す修行

ですから、神秘主義の最大の目標は「神と人間霊魂との合一」ということになります。

人間霊魂と神との合一というのは、人間の魂の一番深いところ、深層意識の一番深いところに神がおられる。それなのに、人間の意識や自我などに覆われてしまっている。だから、覆いをどんどんはぎ取って、きれいにしていくと、光が現れて、すべてが包まれる状態になってくる。人間霊魂の自己意識というか自我をどんどん取っていくと、光のような神が現れて、自分

の意識が全部消え、神に包まれた状態になる。こういう「神との合一」のことを神秘体験といいますが、これを目指していくのがスーフィズムの修行です。神秘主義というのは、頭の中で考えているだけではなくて体験を伴うものであるわけです。

イスラームには、日常生活を規定する「イスラーム法」というのがあります。聖典の『コーラン（クルアーン）』とか、預言者ムハンマドの言行録である『ハディース』がありますが、そこから編み出された日常生活を規定するいろいろな決まりがあるわけですね。お酒を飲まないとか、豚肉を食べないとか、そういうことを守りながら生きていきますが、それだけでは得られなかった内面的な平安とか心の充実感。これを、神秘体験をすることによって獲得しようとする試みをスーフィズムということができると思います。

「スーフィー」という単語がどこからきたかは幾つか説がありますが、「スーフ」つまりアラビア語で「羊毛」、ウールという意味の言葉からきたといわれています。これは貧しい人が着ていた衣装を指します。もとは、中東に住んでいたキリスト教徒の修道士たちが着ていた服らしいです。ぼろぼろの羊毛（スーフ）の服を着て修道士たちが修行していた姿を、イスラーム教徒の禁欲主義者たちが見習って、自分たちもぼろぼろの服を着たのです。

その「スーフ」に「イズム」を付けて「スーフィズム」という言葉が生まれました。「イー」という音を付けた「スーフィー」は「神秘主義者」とか「修行者」という意味の言葉になります。

「禁欲主義」＋「神への愛」

では、スーフィズムはどこから生まれてきたのでしょうか。もちろん、イスラーム以外の影響もあったと思われますが、もともとの種、一番の根本はイスラーム内部から生まれてきたものです。キリスト教とか仏教とか、新プラトン主義の哲学といった影響もあったのでしょうが、内部に元がなければ生まれてこなかったと考えます。

その源流というのは「禁欲主義」にあります。預言

者ムハンマドが亡くなった後、大征服時代に入って、イスラーム教徒が皆、アラビア半島から出て行きました。そして、エジプト、シリア、イランなどにどんどん広がっていって、戦利品がたくさん入ってきます。皆が富裕化していったわけです。それまでは、来世、最後の審判を恐れていた。それなのに、だんだん現世的な繁栄を皆が求める傾向が出てきてしまいました。

それを批判する人たちが存在しました。それが禁欲主義者たちです。その人たちは現世に背を向け、最後の審判を恐れて苦行に励んだわけです。たとえば、食べない、飲まない、眠らない、笑わないで、一日中礼拝をするとか、そういう苦行に励む人たちも出てきました。

有名な禁欲主義者の名前を3人挙げておきますと、まずハサン・バスリー（642～728年）という、ウマイヤ朝時代の質素な禁欲主義者。いつも暗い顔をしていたという人です。それからイブラーヒーム・イブン＝アドハム（～790年頃）という人がいて、この人は富豪の家に生まれましたが、そういうものを全部捨てて放浪の旅に出たという伝承があります。あと、フダイル・イブン＝イヤード（～803年）という人も、全然笑ったことがない人で、彼が死ぬと世の中が明るくなったといわれています（笑）。この禁欲主義者たちは、すごく暗い感じで、とにかく苦行に励んでいるというイメージの人たちです。

その禁欲主義者の中から「神への愛」を説く人が現れて、もう少し明るい感じになっていきます。聖女・ラービア（717頃～801年頃、異説あり）という人は禁欲主義者の女性ですが、この人が最初に「神を愛している」と言って、神への愛を説いた人だといわれています。ただ、後の時代の人が「ラービアがこう言った」と書いているだけで、ラービア自身の本が残っているわけではないので、彼女が本当にそう言ったかどうかはわかりません。

彼女がどういう言葉を残しているかというと、「私は片手に松明（たいまつ）を持ち、楽園（天国）を燃やしたい。そして、もう片手に桶を持ち、水で地獄の炎を消したい」と。要するに、天国に行くとか地獄に行くとか、最後の審

判が怖くて神を崇拝しているのではなくて、私は神を愛しているから崇拝するのだと言ったわけです。ラービアにとっては、自分が天国に行くことが目的で神を崇拝しているのではなくて、ただただ神を求めている。神そのものを私は求めている、そう言ったのです。

それまでは裁きの神で、最後の審判だということで怖い存在の恐ろしい神のイメージでしたが、もっと近い恋人のようなイメージになります。ラービアにとって、神は恋人という存在へと変わっていったわけです。

このように、ラービアなど神の愛を説く人が現れてきて、禁欲主義の流れの一部が、だんだん神への愛を取り入れて、9世紀ぐらいに「スーフィズム」が成立したと考えられています。スーフィズムでは、神を愛しているから神と一つになりたいというわけです。

神を愛して神と一つになるということは、自分の霊魂の自我をどんどん消していくということです。自我を消していくと、一番深い部分に神が現れて、自分の魂がすべて神に包まれている。光にたとえられますが、自分が全部、神の光に包まれているという状態になる。そういう状態を、アラビア語で「ファナー」といいます。「消える」「消滅する」という意味ですが、そういう体験を求めて、神を愛しているから神と一つになるのだという動きが出てくるようになりました。

たとえば、「スーフィー文学」というものが後の時代で出てきます。これは神とスーフィーを男女の恋愛関係にたとえるものです。

有名な神秘主義詩人に、ニザーミー（1141～1209年）という人がいますが、この人が『ライラとマジュヌーン』という散文詩の物語をペルシャ語で書いていて、和訳も出ています。

『ライラとマジュヌーン』はどういう話かというと、ライラというのは女の人の名前で、カイスという男性が出てきます。2人は好き合っていましたが、家同士の仲が悪くて結婚できず、ライラは他の人と結婚してしまい、カイスは気が狂ってしまいます。気が狂ってしまった状態のことを、アラビア語で「マジュヌーン」といいますが、彼はマジュヌーンになって荒野に飛び出して行き、動物と一緒に暮らすようになるのです。

「ライラとマジュヌーン」をモチーフにした19世紀の絨毯

この話は、ライラを神だと解釈できるわけです。ライラが神で、カイスがスーフィーです。もちろん、そうは書いてないけれども、そう解釈できます。

このようなスーフィー文学がいろいろ書かれました。神が愛される対象として描かれていて、たとえば王子とか美女とか美少年、そういう人物として物語に出てきます。スーフィーはそういう人を愛する者として、たとえば乞食として登場したりします。乞食が王子様を好きになるとか、そういう話が書かれたわけです。

ウラマー（法学者）との対立から和解へ

こういうスーフィー文学が盛んに書かれるようになるまでには、実は結構、紆余曲折がありました。スーフィズムが皆に認められるようになるまでに、「ウラマーとの対立から和解へ」という過程をとっていきます。

「ウラマー」というのはいろいろな学問を修めた学者のことです。法学とか神学、あとコーラン解釈学とか、アラビア語文法学とか、いろいろな学問がありますが、イスラームの諸学問の中で一番大事なのは法学です。日常生活を規定する「イスラーム法」が一番大事だからです。それで、ウラマーはイスラーム法学者と訳さ

れることが多いようです。

このウラマーとスーフィーが対立していた時代がありました。初期のスーフィーのなかには、「イスラーム法を守って生きていくよりも、神との合一、神秘体験を積むことのほうが大事だ」と考える人たちがいて、なかにはイスラーム法を無視してもいいのだといって、お酒を飲むとか、同性愛に走るとか、そういう人たちが出てきて、ウラマーと対立するわけです。

その対立の究極が、ハッラージュ（858頃～922年）というスーフィーです。この人は、ファナー状態のときに「我は真理なり」と叫んでしまったのです。「真理」というのは神を指していますから、「自分は神だ」と叫んでしまったことになるわけです。スーフィーがファナー状態のときにつぶやく言葉を酔言――酔っぱらった状態で言った言葉といいますが、ハッラージュが「私は神だ」と叫んだ。それが神への冒瀆（ぼうとく）だとされて、批判を浴びます。彼は、アッバース朝のカリフに目をつけられて、処刑されてしまいました。手を切られたり、足を切られたり、大変に残酷な拷問を受けた後に処刑され、その後、遺体を焼かれて、灰をチグリス川に流されてしまった。こういう悲劇のスーフィーも出てきました。

このような対立を経て、ガザーリー（1058～1111年）という人物が次に出てきます。この人が、ウラマーとスーフィーの橋渡しをします。もちろん、彼以外にもそういう役割を果たした人はいますが、一番重要な人物はやはりガザーリーです。

ガザーリーは、イスラーム思想史上最大の思想家のひとりだという位置づけです。セルジューク朝時代（1038～1157年）のウラマーです。セルジューク朝というのはトルコ系の軍事王朝で、イランやイラクあたりを支配しました。イスラーム世界の指導者「カリフ」は、その前のアッバース朝から続いていましたが、このころにはカリフの権威が非常に失墜してしまって、もうセルジューク朝の「スルタン」が実質的には支配しているという時代でした。カリフは有名無実化して、実力のある人が支配している。ガザーリーは、こういう時代のウラマーでした。

彼は本当に学問のエリートで、33歳のときに、バクダッドのニザーミーヤ学院の教授に抜擢されたという、すごい人です。ニザーミーヤ学院というのは、セルジューク朝の宰相のニザーム・アル・ムルクが自分の名前をつけて各地につくった、大学のような機関です。

ガザーリーはニザーミーヤ学院で法学や神学を教えていたわけですが、スーフィズムに回心したことで有名です。彼は、「どうして自分はイスラーム教徒なんだろうか」と悩み、だんだん確信が揺らいできていたのです。そのために、神学とか、哲学とか、シーア派とか、いろいろと研究してみたけれども、スーフィズムの神秘体験を積んだときに、やっと信仰の確信がもてたというのです。彼は教授職を辞職しました。そして、バクダッドからまずシリアに行きました。その後、メッカ（マッカ）巡礼をして、またパレスチナを2年間、放浪したりします。そういう遍歴の最後に、自分の生まれ故郷であるイランのトゥースというところに戻って、そこで弟子を育てながら本を書いたりして過ごした人です。

彼をイスラーム思想史上に位置づけると、「スンナ派思想の枠組みの完成者」だといえます。スンナ派というのは、大体10世紀から11世紀ぐらいにできてきます。そのときに、「スンナ派のイスラーム諸学に含まれる内容は、これこれですよ」というのを、はっきり示した人がガザーリーだったと思います。

イスラーム思想には、いろいろな流れがあって、神学、哲学、シーア派、スーフィズムなどがありました。ガザーリーはイスラーム哲学を批判したけれども、アリストテレスの論理学など取り入れられるものは取り入れました。また、「あやしいもの」と思われていたスーフィズムも「決してあやしいものではないのだ。スーフィズムで神秘体験を積むことは大事ですよ」と認めて、スンナの思想の中に取り入れたわけです。その一方で、神秘体験だけ積んでいればいいというのではなく、イスラーム法もちゃんと守らなければいけませんと彼は言ったわけです。イスラーム法を守りながら、さらに「ファナー（神との合一）」を体験するという生き方をしなければいけないと説いたのが、ガザーリーです。

「教団」の形成――スーフィズムの大衆化

このように、ガザーリーが、スーフィーとウラマーの橋渡しをしました。「あのガザーリーが認めた」ということで、皆が「スーフィズムはあやしくない」ということがわかったわけです。

その後どうなったのかというと、今度は「タリーカ」というスーフィー教団ができるようになってきました。ウラマーとスーフィーが対立していた時代には、スーフィーは、ひっそりとしていなければならず、ひそかに集まっていました。しかし、ウラマーと和解し、公認されるようになって、おおっぴらに仲間集めができるようになったのです。それで、著名なスーフィーを中心に仲間が集まって教団ができるようになり、スーフィズムがどんどん広まって大衆化していくという現象が起きました。

スーフィー教団は、まず核になる人たちのスーフィーの道場があって、そこに著名なスーフィーのお師匠さんと修行する人たちが住み込んでいます。さらに在家のスーフィーもいて、ふだんは普通の生活をしていて、定期的に修行をしに道場に行きます。タリーカを構成している人は、道場に住み込んでいる核になる人と、周りにいて普通の生活をしている人という構造になっているわけです。

このタリーカがどんどん発展していくのは12世紀以降です。最初はイラクにできたといいますが、さまざまなスーフィー教団が形成されるようになって、そのうち、多くのイスラーム教徒がどこかのスーフィー教団に属しているという時代がやってきました。アッバース朝（750～1258年）が滅びたころから前近代まで、いわば「スーフィズム一色」という時代があったのです。

スーフィー教団は本部もありますが、広めていくので各地に支部もつくりました。その際、「どの宗教も深層部分は同一だ」と考えるスーフィズムの寛容さや普遍主義が、イスラーム教を広めるのにすごく貢献しました。イスラーム商人とスーフィーが、いろいろなところに出かけて行って、土着の宗教などを消すのでは

なくて、そこに混ざり込んでいくようにしてイスラーム教が広がっていきました。たとえば、南アジアのインドとかアフリカですね。アフリカは北アフリカだけではなくて内陸のほうまで広がっています。さらに、中国や東南アジアなど、ものすごく広い地域がイスラーム化していくことになりました。

いわゆる「ジハード（聖戦）」だけではこんなに広がらなかったわけです。ジハードで広がったのは中東の一部だけで、今のように広い地域に広まったのはタリーカとか、イスラーム商人のおかげです。

タリーカはいまでも続いていますが、近代や現代にどうなったかというと、近代に中東地域がだんだん植民地になりそうな時代になり、スーフィー教団は反帝国主義闘争の主役として戦ったりしました。たとえば、リビアに「サヌーシー教団」というのがありますが、リビアをイタリアが植民地にしました（1911年）。そのときに、サヌーシー教団の教団長ウマル・ムフタールがイタリアに対してレジスタンスを起こしたのです。結局、戦いに敗けて、ムフタールは処刑されてしまいましたが（1931年）。彼の戦いは「砂漠のライオン」という映画で描かれ、アンソニー・クインがウマル・ムフタールの役をやっています。映画のDVDもあって、見ていると本当にかわいそうでした。他にも、フランスと戦ったアルジェリアの「カーディリー教団」があります。

タリーカは現在も、ちゃんと存在していますが、実は、だんだん人気がなくなってきています。政治・社会上も大きな勢力ではなくて、ムスリム同胞団などのイスラーム主義組織に取って代わられているのが現状です。動員力、資金力の面で、イスラーム主義運動組織のほうが大きくなっていて、スーフィー教団は存在しているけれどもあまり影響力がなくなっているのが現状です。

2　スーフィズムの実践

次に「スーフィズムの実践」として、2点、お話しします。ひとつは聖者崇敬と聖者廟参詣について。もうひとつは神秘修行の話です。

聖者――神との仲介者

まず「聖者崇敬と聖者廟参詣」です。聖者はスーフィーだけではありませんが、スーフィズムと重なっているので触れておきたいと思います。

先ほど、12世紀以降にタリーカができてきたと申しましたが、さらに聖者崇敬・聖者廟参詣も進んでいきました。

「聖者」とはどういう人かというと、アラビア語では「ワリー・アッラー（神の友）」といいます。ワリーは、近くにある者、友という意味で、「神の友」を「聖者」と訳しています。人々の祈願、願い事を叶えてくれるように神に取りなす力を「バラカ（神の恩寵をもたらす力）」といいますが、このバラカがあると考えられている人が「聖者」なのです。つまり、神の友なので、神との仲介をしてくれる。神との仲介者であって、民衆が現世利益を求めてお願いに行くと取りなしてくれるということです。

民衆がお願い事をする場合、聖者がまだ生きていれば聖者のところに行くし、亡くなっていたらお墓に行きます。そうすると、聖者が神に取りなしてくれて、神が願いを成就してくれるという仕組みになっているわけです。

聖者は大きく2つに分けられます。「預言者ムハンマドとその子孫」が第1のタイプです。第2のタイプは奇蹟を起こす人であり、著名なスーフィーとか有名な学者、偉人、ジハードで殉教した人とか、ほかには異教の聖者がイスラーム教の聖者に混じったとか、海辺に流れ着いた漂流遺体が聖者になったという例もあります。この2番目のタイプの聖者は本当にいろいろなバリエーションがあって、さまざまな人たちが入ってきます。スーフィーだけではありません。

そして、だれが聖者かというのは、会議か何かが開かれて決まるわけではなくて、人々の合意によって決まります。「あの人、聖者だよね」と皆が思うと、その人が聖者になっていくわけです。

ですから、聖者はスーフィーだけではありません。しかし、だれが聖者なのかとか、聖者のヒエラルキー（位

階）を議論したり、聖者たちの人生をコンパクトにまとめた『聖者列伝』が書かれたのはスーフィズムにおいてです。興味のある方は、アッタールというスーフィーが書いた『聖者列伝』があります。アッタールはペルシャの詩人で、有名な聖者をピックアップした列伝です。藤井守男先生による和訳も出ています（『イスラーム神秘主義聖者列伝』国書刊行会）。

メッカ巡礼より身近な「聖者廟参詣」

聖者はスーフィーだけではありませんが、スーフィー聖者の数がとても多いです。また、聖者のお墓参りに行くということも、スーフィーに限りませんが、いまも昔も盛んにおこなわれています。「聖者廟参詣」のことをアラビア語で「ズィヤーラ」といいます。訪れる、訪問するという意味です。これに対して、メッカ（マッカ）巡礼は「ハッジ」といいまして、日本語では「巡礼」と訳しています。「ズィヤーラ」は「ハッジ」とは峻別される「墓参・参詣行為」のことですから、日本語でも訳し分けているわけです。

少しメッカ巡礼と比較したいと思いますが、メッカ巡礼というのはイスラーム教徒の義務です。『コーラン』の3章97節には「この家への巡礼は，そこに赴ける人びとに課せられたアッラーへの義務である」（日本ムスリム協会訳）とあります。この家というのはメッカのカーバ神殿のことで、そこに赴くことが可能な人にとっての義務であるとなっています。行かれる人は行きなさいということです。というのは、メッカ巡礼というのは金銭的にも体力的にもすごく負担が重いからです。ですから、可能であれば一生に一度行けばよいということです。

カーバ神殿のカーバというのはアラビア語で「立方体」という意味で、その名の通りのかたちをしていて、黒い布がかかっています。メッカ巡礼のときには、周囲を人が埋め尽くします。

メッカ巡礼は期間もきちんと決められていて、ヒジュラ暦（イスラーム暦）の「巡礼月の8日から10日」におこなわれます。ヒジュラ暦は、ムハンマドがメッカからメディナ（マディーナ）へと「ヒジュラ（聖遷）」し

た622年を元年とする太陰暦です。

このメッカ巡礼に対して、聖者廟参詣は、聖者のお墓に好きなときに行けばいいというものですから、だいぶ違います。

メッカ巡礼が終わった後に、多くの人がメッカからメディナに行きます。メディナには「預言者モスク」があります。ムハンマドがヒジュラした後に住んでいて、そこで亡くなったところです。モスクとお墓とはセットになっていることが多くて、大体、お墓がモスクの中にあるかたちになっています。「預言者モスク」にも、預言者ムハンマドの霊廟があって、そこに皆が参詣するわけです。それはハッジではなくて、「ズィヤーラ（参詣・墓参り）」といいます。聖者廟参詣は、いまも昔も盛んで、このムハンマドの御廟以外にも、たくさんの聖者廟があります。

ただ、聖者廟参詣に対しては、近現代の前にも批判がありまして、特に近代以降においては批判されています。つまり、「聖者崇敬とか聖者廟参詣は、神以外への崇拝、多神崇拝につながる」という批判です。要するに、聖者を拝んでいるではないかということです。イスラーム教では、アッラー、神と一緒に並べて崇拝するのは多神崇拝で、一番やってはいけないことになっています。もちろん、聖者廟参詣に行く人たちは「自分たちは聖者を拝んでいるのではありません」と言います。自分たちはあくまで神を拝んでいて、聖者を拝んでいるのではないと言いますが、「だめだ」と批判されるわけです。

一番大きな批判運動は、18世紀半ばにアラビア半島で起こったワッハーブ派という運動です。この人たちは「ムハンマドの時代に帰れ」と言いました。アラビア半島が停滞している。この原因は何だろうかというと、預言者ムハンマドの時代にやっていなかったことをやっているからだめになってきたんだというふうに考えたわけです。

そして、復古主義的なイスラーム改革運動を始めて、「特にいけないのが聖者廟参詣である。これは、ムハンマドの時代にはやっていなかった悪しき逸脱行為である。それが停滞の原因だ」として、豪族のサウード家

から軍事的な支援を受けて聖者廟を壊していきました。アラビア半島だけでなく、イラクにまでも出かけて行って、聖者廟をどんどん壊していくという運動をしました。その結果、できた国がサウジアラビア王国で、サウジというのはこのサウードからきています。「サウード家のアラビア王国」という意味です。ですから今、サウジアラビアには聖者廟はありません。ただ、ムハンマドのお墓はありますが、それも実は1回壊されています。

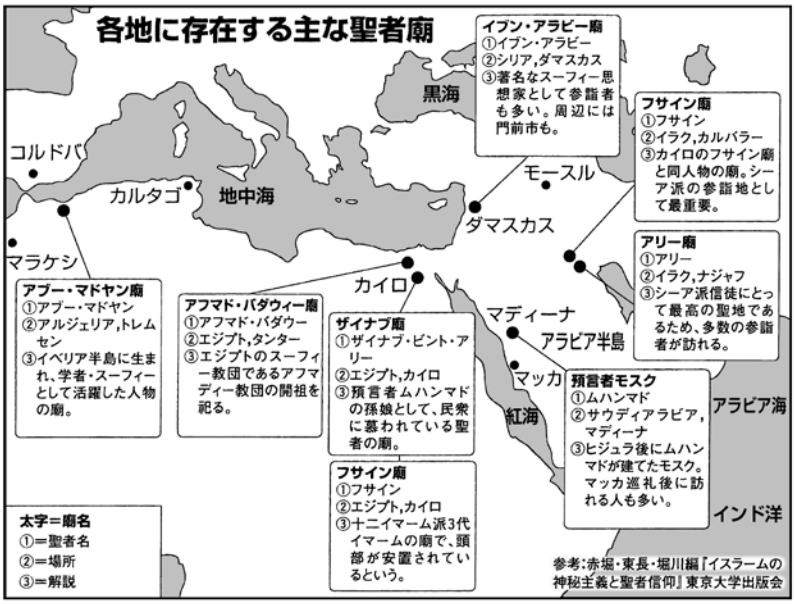
しかし、サウジアラビアを除く多くのイスラーム世界では、今も聖者廟参詣が熱心におこなわれています。聖者のお墓参りというのは、メッカ巡礼よりも身近な存在なんですね。今、イスラーム教徒は13億人とか16億人いるといわれていますが、メッカ巡礼に行ける人は1年に２００万人だけです。ですから、ほとんどの人が一生に一度も行かれないわけです。そうなると、メッカ巡礼ではなくてもっと身近な聖者廟に行きたいと思う人が多いのは当然だろうと思います。

あの地この地に、さまざまな聖者廟

中東各地の聖者廟の地図をご覧ください。以前、『面白いほどよくわかるイスラーム』という本を出しまして、そこに載せた地図です。聖者廟は、もっとたくさんありますが、ちょっとだけピックアップしました。

右下のほうのマディーナ（メディナ）に「預言者モスク」があります。少し北のほうに行くと、イラクに「アリー廟」と「フサイン廟」があります。アリーというのは、ムハンマドの娘婿です。スンナ派では第４代正統カリフであり、かつシーア派にとっては初代の指導者（イマーム）に当たる重要人物です。フサインは、アリーの息子で、ムハンマドの孫に当たります。シーア派の第3代の指導者です。

次に、エジプトのカイロに行くと「ザイナブ廟」があって、とてもきれいなモスクです。ザイナブという人はアリーの娘で、ムハンマドの孫娘になります。カイロには、もうひとつの「フサイン廟」もあります。イラクのフセイン廟の人と同じ人物の廟で、カイロに



青柳かおる著『面白いほどよくわかるイスラーム』（日本文芸社）より

は頭があってイラクには胴体があります。どうしてそうなったかという話は、後ほどご説明したいと思います。

エジプトには「アフマド・バダウィー廟」があり、その西の北アフリカのほうに「アブー・マドヤン廟」があります。カイロの北東のダマスカス（シリア）には、「イブン・アラビー廟」があります。3人とも、有名なスーフィーです。

私は以前、ダマスカスに行きまして、イブン・アラビー（1165～1240年）についても少し調べたことがあります。この人は、スーフィズムを代表する神秘哲学者で、スーフィー教団の開祖とかではなく、いつも思索にふけっているタイプの人でした。スペインに生まれて、いろいろなところを遍歴して、最後はダマスカスに住みました。彼は、世界を神の自己顕現と見る「存在一性論」という理論を唱えました。「神と世界の存在は一つです」と言ったのです。神は「存在」としか言いようがない、本当に未分化のまっさらな状態のものであって、その名付けられ

ない存在が分節化して自己顕現したものが、この現象界である――これが「存在一性論」という理論で、神と世界は表裏一体だというわけです。「神と世界は隔絶していて、まったく違うのだ」という考えの人たちとは対立し、結構批判を受けましたが、すごく人気がある考え方でした。

そのような理論を考えたのがイブン・アラビーという神秘哲学者です。ダマスカスに、カシオン山という山があって、その中腹に彼の廟はありました。廟の周辺は、まったくアメリカナイズされていないし、アルファベットの看板などもなくて全部アラビア語だったりして、何となく昔のまま残っている感じです。シリアというのはこんな感じの場所が多いようです。

廟も、外見はそんなにきれいではありませんが、中は結構きれいでした。中に入るとまずモスクがあります。柱がたくさんあり、天井はドームではなくて平たい普通の天井で、シャンデリアがあり、床に絨毯が敷いてある。こんなモスクがアラブ地域には多いですね。少し奥に入ると、正面の壁にくぼみがありますが、これは「ミフラーブ（聖龕）」といって、メッカの方角を示しています。その隣には、「ミンバル」と呼ばれる説教壇があります。金曜礼拝のときに、ここから説教師が皆に説教するわけです。この2つはどんなモスクにも必ずあります。

さて、写真はイブン・アラビーの廟です。緑色のガラスケースにアラビーの棺が入っています。ケースの周りには、男性エリアと女性エリアがあります。私が行ったときには、どちらにも5、6人ぐらいの人が来ていました。座っている人もいるし、立っている人もいます。本を読んだり、願い事をしたり、瞑想したり、静かに過ごしている人がいます。

聖者廟には、スーフィーに限らずいろいろなバリエーションの人たちのお墓があります。カイロには「死者の街」という一大参詣地があって、カリフとかスーフィーとかいろいろな有名人のお墓が、たくさん集まっているエリアです。「聖者廟群」ですね。いまは、ちょっとスラム街のようになっていて、行ってみると、観光客はだれもいないという状態でした。参詣に来てい

イブン・アラビー廟内陣。棺を包むケースは緑色（講師撮影）

る人ぐらいしかいなくて、日本人にはまず会わないという感じです。

場所が全く変わりますが、中央アジアのサマルカンド（ウズベキスタン）に聖者廟群があって、そのひとつに「クサーム・イブン・アッバース廟」があります。クサームという人はムハンマドのいとこで、中央アジアのジハードに行って亡くなったという人物です。中央アジアとかイランの建築は大体、入口が四角くて、後ろにドームがあるタイプが多いですが、この廟もそうです。

シーア派の「イマーム（指導者）廟」

さて、いろいろなタイプの聖者のお墓を紹介してきましたが、次に別扱いとして、シーア派の「イマーム廟」についてお話ししたいと思います。聖者廟としては、どうしても触れざるをえないものです。イマームというのはシーア派の指導者のことで、アリーとその子孫のことです。シーア派の人も、もちろん聖者廟に行きますが、シーア派はイマームの墓が大事で、スーフィー

などの聖者についてはあまり眼中にないわけです。

実は、イマーム廟はほとんどイラクにあって、イランには少ししかありません。もともとシーア派の本拠地はイラクにあったからです。いまは「イランがシーア派」というイメージが強いかと思いますが、イランがシーア派になったのはサファヴィー朝（1501～1736年）ができてからで、昔は、イランはスンナ派でした。ですから、イマームのお墓も大体イラクにあって、特に有名なのが、ナジャフの「アリー廟」と、カルバラーの「フサイン廟」です。お父さんと息子（ムハンマドの娘婿と孫）の御廟ということになりますね。

「アリー廟」は入口が金色で、やはり四角く、後ろがドームになっています。中が緑色でキラキラしていて、とてもきれいです。棺も緑色です。

カルバラーの「フサイン廟」には、彼の胴体があると言われています。カイロの「フサイン廟」には頭があるとされていましたね。どうして分かれてしまったのかというと、フサインはもともとメディナ

第３代イマームであるフサインの墓廟があるモスク（イラク・カルバラー）

に住んでいました。しかし、イラクのクーファという街のシーア派が、ウマイヤ朝に対して反乱を起こすから来てくださいと要請するわけです。それで、フサインは出かけて行きましたが、途中で、ウマイヤ朝の軍隊に包囲され、殺されてしまいました。その場所がカルバラーです。フサインは殺されて首を切られ、胴体はこのカルバラーに埋葬されたのです。首はどうしたかというと、ダマスカスに持って行かれてしまいました。というのは、ダマスカスがウマイヤ朝の首都でしたが、そこにカリフのヤジードという人がいて、彼が「フサインの首を実検しなければいけない」というので、持って行かれたわけです。実検が終わった後は、「ウマイヤ・モスク」にずっと置かれていたのですが、その後、10世紀に、北アフリカでファーティマ朝（909～1171年）というシーア派の王朝ができて、その人たちが、フサインの首をダマスカスから、王朝の首都カイロに移したわけです。それで今は、カイロの「フサイン廟」のほうに頭があるといわれています。

ちなみに、ダマスカスの「ウマイヤ・モスク」は、もともとキリスト教の教会で、イエス・キリストに洗礼を授けた「洗礼者ヨハネ」のお墓があることで有名です。また、ウマイヤ・モスクの隣には、十字軍と戦った英雄サラディンのお墓があります。

「神との合一」へ神秘修行の階段

次に、「スーフィズムの実践その2」として、神秘修行のほうに移っていきたいと思います。

先ほど、「思想と歴史」のところで、スーフィーとウラマーが和解したという話をしましたが、その結果、だれもがおおっぴらに修行できるようになりました。どうすれば「ファナー」、神との合一に至れるのか、なかにはそれを本に書く人も出てきました。それが残っているので、私たちは知ることができるわけです。

「神秘階梯」（マカーマート）――神秘的な階段のことですが、そういう階梯を一段一段、上っていって、ファナーに至るわけです。いろいろな修行方法があって、あるスーフィーによれば次のような順番でやるのだといいます。まず「悔悟」――悔い改めて「自分はスー

フィーとして生きていくのだ」と心を入れかえる。そこから始めて「禁欲」「清貧」「謙虚」「誠実」「満足」、一歩一歩、こういう状態に至ることを目指していきます。最終的には、ファナーを目指して、心を神に集中する修行をおこないます。

その修行は大きく分けると2つあります。ひとつは「ズィクル」という修行です。これは、一定の短い唱句を繰り返します。「アッラー」という名前を含んだ短い文句を何度も何度も繰り返して口で唱えるという修行です。もうひとつは「サマー（セマー）」という修行で、これは口で唱えるだけではなく、歌舞音曲ですね、つまり音楽とか踊りを伴う修行です。日本語だと「旋回舞踊」とか、「スーフィー・ダンス」と訳されています。

先ほど、スーフィー教団がいろいろできたと申し上げましたが、教団ごとに独自の修行方法がありまして、ズィクルをやっているところもあれば、サマーをやっているところもあるし、ズィクルにもサマーにも、いろいろと種類があります。

ズィクル：唱句を繰り返して神を想起

まず「ズィクル」ですが、アラビア語では「想起する」、直訳すると「思い出す」という意味です。唱句を繰り返して、神を思い出すということです。一切の雑念を振り払って、ひたすら短い祈祷句を唱えます。

たとえば、「アッラー、アッラー」、「神よ、神よ」と唱える。他には「ラー・イラーハ・イッラー・アッラー」という言葉を唱えたりしています。最初の「ラー」というのは否定の「ノー」、「ない」ということです。「イラーハ」は神ですから、「神はない」という意味です。次の「イッラー」は「それ以外には」という意味です。「アッラー」は、神を意味する「イラーフ」に定冠詞の「アル」――英語でいえば「ザ」が付いたもので、「ザ・ゴッド」、要するに「唯一神」のことです。ですから「イッラー・アッラー」で「唯一神の他には神はない」という意味になります。

そういう言葉を何度も何度も唱えるのが「ズィクル」で、一人で部屋にこもってやることもあるし、道場に

行って皆でおこなう場合もあります。皆で立ったまま円陣をつくって向かい合い、唱える教団もあります。

実際、どういう感じなのかということを、井筒俊彦先生が『イスラーム哲学の原像』（岩波新書）で書いていらっしゃるのを要約して紹介します。

――身体と心を清浄にしたところで、修行者は薄暗い静かな部屋に入って香をたき、あぐらを組んで坐ります。そして、「ラー・イラーハ（神はない）」と前半部分をゆっくり唱えます。唱える際に、意識の集中点を体のいろいろな特定の部位に定めて、それをだんだんと移していきます。最初に「ラー」と発音しますが、そのときは、左の胸の先端のところから、強く押さえながら、下から上へ押し上げるように「ラー」と発音します。次に「イラーハ」と発音するときには、意識の集中点は、左の胸から右肩あたりまできているといいます。右の肩から後ろ側に投げ出すような気持ちで「イラーハ」と唱え、ただちに後半の「イッラー・アッラー」という部分に移りますが、今度は右肩のほうから最初の左胸のほうにまた意識のエネルギーを移しながら「イッラー」と言います。そして移りきったら、最後に「アッラー」という言葉を、力を込めて、あたかもハンマーで杭を打ち込むような気合で、自分の心臓のまっただなかに打ち込みます。最後の「アッラー」という言葉は特に心を込めて唱えます――こんなふうに説明されています。

修行の過程は何日も続き、人によっては何年も続けるという大変な修行です。ただ、音楽もまじえてのズィクルもあり、そういう動画などを見ているかぎりでは楽しい感じに聞こえることもあります。

サマー：旋回する「スーフィー・ダンス」

次に「サマー（セマー）」です。「スーフィー・ダンス」とも訳されますが、アラビア語でサマーというのは「聞くこと」で、もともとは「音楽」という意味です。歌とか音楽だけというのもありますが、くるくる回ると旋回舞踊を伴うことも多く、道場に集まって集団でおこなうことが多いようです。

ファナーに至るため、恍惚状態に陥るための有効な

手段としてスーフィズムの初期から広く行われてきました。その様子を描いたミニアチュール（細密画）が残っているので、それがわかります。ただ、歌とか音楽とか踊りというのは修行者の堕落を招くというので、サマーをやっていいのか悪いのか賛否両論の議論が起きました。イスラーム法的には「やらないほうがいい行為」に、サマーは分類されました。しかし、ガザーリーが何と言ったかというと、『宗教諸学の再興』の「サマーの章」を読んでみると、初心者にとっては、サマーは有害だが、もっと修行が進んだ者にとっては、忘我状態に至るためにサマーは有効であると書いています。それで、やってはいけないと言っている人もいたけれども、禁止されることなく、結局ずっと続いてきたわけです。

２００３年にカイロに行ったときですが、「スーフィー・ダンス」を「ムハンマド・アリー・モスク」でやっていました。7時に開演するというので6時過ぎに行くと、待合室に案内されました。席は自由席です。まず太鼓や笛の楽器演奏が始まって、それが終わると今度は踊り手さんが登場します。最初は黄色い服を着た人が出てきて、次に赤とか黄色とか緑のカラフルな衣装を着た踊り手が登場し、くるくるとすごい速さで回ります。旋回する様子がよくわかるように、踊り手がズボンの上にスカートをはいています。それで、この踊りのことを「スカート」を意味するアラビア語の「タンヌーラ」と呼んでいるようです。このスカートは3枚くらい重ねて付けていて、取り外しできます。外したスカートを手に持って、くるくる回るわけです。

どこからこの踊りが入って来たのか、あるエジプト研究者に聞いたら、「多分、オスマン帝国のときに、トルコからエジプトに入って来たのではないか」というお話でした。

メヴレヴィー教団と開祖ルーミー

最後に、これまで話してきた要素がギュッと全部詰まっている例として「メヴレヴィー教団」のお話をしたいと思います。スーフィー教団と聖者廟と旋回舞踊という3つの複合的な要素が、この教団に詰まってい

るのです。

教団の開祖は、ルーミー（1207～1273年）という人物です。ペルシャ語で神秘的な詩をたくさん書いた人で、「ペルシャ文学史上、最大の神秘主義詩人」とされ、もちろんスーフィー聖者です。音楽を愛した人だったそうです。

生まれたのはアフガニスタンですが、放浪の末、トルコのコニヤ（コンヤ）という町に住みました。トルコのある「アナトリア（小アジア）」は、当時、アラビア語で「ルーム」といわれていました。「ルームの人」という意味でルーミーと呼ばれたわけです。

あるとき、この町を、シャムス・タブリーズという放浪のスーフィーが訪れます。ルーミーは心酔し、彼のことばかり考えるようになってしまいました。ルーミーは説教師をしていたのですが、それも辞めます。学生たちへの講義や弟子の指導も放棄して、シャムスを追いかけ、日夜仕えました。シャムスからインスピレーションを得て、詩の才能も開花したそうです。ところが、ある時、師であるシャムスが失踪してしまいます。ルーミーの周囲の人たちが妬んで殺したという説もありますが、とにかくいなくなったわけです。ルーミーはシャムスを捜し回りましたが、見つかりません。結局、ルーミーは「シャムスは自分の中に生きているんだ」と思い直し、その後、ますます詩作とか、音楽とか、舞踊に専念するようになったそうです。お墓である「ルーミー廟」が今もコニヤにあります。

このルーミーを開祖と仰いで創設されたスーフィー教団が「メヴレヴィー教団」です。ルーミーの尊称を「メヴラーナー」といって「我らの師」という意味ですが、メヴラーナーからメヴレヴィーという言葉ができました。ルーミーが生きているときからありましたが、息子のスルタン・ワラドが整備したそうです。

教団は、オスマン帝国の上流階級に広がって、保護を受け、栄えたのですが、1923年にトルコ共和国が成立すると、イスラームを政治から切り離すことを主眼とした政教分離政策が打ち出され、スーフィー教団は閉鎖されてしまいます。メヴレヴィー教団も解散させられて、その音楽も禁止されました。今もその原

メヴレヴィー教団の旋回舞踊（イスタンブールで）

則は続いていますが、メヴレヴィー教団の「旋回舞踊」はおこなわれていて、大衆の支持を得ています。どういうことかというと、「これはトルコの文化遺産である」「伝統芸能である」ということで許されているのです。ですから、スーフィーが踊っているとはいわないで、「トルコの伝統芸能をやっているんです」と説明して、国家の庇護を受け、公的な資金で保護されているわけです。

トルコのメヴレヴィー教団の旋回舞踊は、２００７年の夏に日本で公演がありました（ルーミー生誕８００年記念）。

「天体の運行」に合わせた旋回

舞踊の実際は、どんなものかといいますと、50年くらい前に、イギリス人ジャーナリストのデイヴィド・ホサムが『トルコ人』（邦訳は護雅夫訳、みすず書房）という本を書いていますが、そのなかに旋回舞踊の様子が書いてあります。

――メヴレヴィー教団長の先導のもとに、16人のデ

ルヴィーシュ（スーフィー）が広間に入ってきます。だれもが、ズィッケという先の細長い植木鉢形の帽子をかぶり、フルカと呼ばれる黒いガウンをまとっていて、床に坐ります。伴奏のために、デルヴィーシュの服装をした20人ほどの楽士、音楽隊がいます。ネイという葦笛が独奏されると、デルヴィーシュたちは立ち上がり、教団長に導かれて、まず広間を三周します。そして黒いガウンを脱ぎ捨てます。すると、スカートが付いた真っ白な衣装になります。これでいよいよ旋回舞踊、トルコ語でセマー、アラビア語でサマーを始める支度が整ったわけです。

最初は一人がゆるゆると、そして左回りに旋回し、続いて次の人が回り始め、どんどん全員が回るということになります。旋回している間、彼らの両腕はずっと伸ばされたままで、右手の掌は常に上を向け、左手の掌は下を向いています。

旋回舞踊は、神との合一に至る手段ですが、衣装にもいろいろな意味があります。たとえば黒いマントは墓地を表していて、長い帽子は墓石を象徴している。白い衣装は死者の着る経帷子（きょうかたびら）を表しているそうです。そして、黒いガウンを脱ぎ捨てたというのは死からの蘇りです。

右手の掌を上に向けているのは神からの慈悲を天から受けるためであり、それを今度は、下に向けた左手の掌によって大地に移し与えるのだそうです。左回りに回るのは「天体の運行」に従っていると説明されています。神秘的合一に至るためには「回る」という動きが最適だというわけですが、これは天体の動きをまねしているのだというのです。

この旋回舞踊の起源は何なのかを調べましたが、結局わかりませんでした。護雅夫先生は、中央アジアの遊牧騎馬民族のシャーマニズムにおける旋回儀式が入ってきたのではないかとおっしゃっています。リーダーの汗（ハン）をフェルトの上に乗せて、9回、皆で回すというんです。そうすると、その汗に神がとりつくということで、そこから来ているのではないかと。他にも、木の周りを皆でグルグル回ると、木に神が宿るとか、自分が回れば自分に神が宿ったり、回っているものに神

が宿るというような考え方がシャーマニズムにあるので、旋回舞踊もそこからきているのではないかという御意見です。

ただ、スーフィズムには外からアッラーが宿るという考えはないわけです。自分の魂の一番深いところに神が現れてくると考えるので、そこがちょっと違うかなという気はします。ただ、回るという行為に神秘的な意味があるというのは、そうかもしれないとは思いますが、結局、答はわかりませんでした。

いずれにしても、メヴレヴィー教団においては、旋回舞踊という修行が「神との合一」のために最も適した方法として採用されました。先のエジプトでもそうですが。そして、その「回る」という動きが「天体の動きと同じですよ」という説明が、たぶん後から考えられたのだと思います。しかし、そもそもどうして回るようになったのかはちょっとわかりません。

ちなみに、「ファナー」に至った場合、その意識がどれくらい続くのかというと、たいていは数秒から数分で終わってしまうそうです。もっと長く続く人もいるようですが、ともかく、すぐに終わってしまって、また日常の世界に戻ってこなければならないんですが、一度ファナー状態を体験した人は違うそうです。日常に戻ってきても、すべてが神から来ているのだというような見え方がするといいます。ファナー状態も大事だけれども、ファナーから帰ってきた後がすごく大事であるわけです。そして、こういう合一体験を何度も繰り返し積んでおくと、死んだ後に神様に会える、神に会うことが容易になるといわれています。

まとめ

きょうは、さまざまにお話しさせていただきましたが、まとめますと、「スーフィズムの思想と歴史」については、まず「禁欲主義」を源流として、「神への愛」――神を愛しているから神と一つになりたいのだという「神との合一」を目指すスーフィズムが9世紀ごろに誕生しました。もともとは一部のエリートの運動で、ウラマー（イスラーム法学者）などにはあやしい存在だと思われていましたが、ガザーリーなどの努力によっ

てスーフィーとウラマーが和解し、スーフィズムが公認化されて大衆化していったわけです。

その結果、スーフィー教団、タリーカが発展しました。そして、スーフィー聖者を中心とする聖者崇敬と聖者廟参詣もおこなわれるようになりました。聖者はスーフィーだけに限らず、いろいろなタイプの人がいますが、かなりスーフィズムとも重なっています。そして、ズィクルやサマーの神秘修行も整備されて、いろいろなタリーカで、それぞれの修行がおこなわれるようになっていきました。

短時間でスーフィズムの話をまとめましたが、あまり知られていないイスラーム神秘主義と、それに関わる実践、たとえば聖者廟の参詣とか、ズィクルやサマーの修行などがいまでもおこなわれているのだということを知っていただければ幸いです。

（あおやぎ　かおる／新潟大学人文学部准教授）

（2011年11月7日、東京新宿区の日本青年館で行われた講演をまとめたものです）